駒澤大學佛教學部研究紀要第四十一號　昭和五十八年三月

現代における仏教伝道の一考察

皆川広義

一　仏教の原点

釈尊の出家求道の原因は、四門出遊の物語が象徴的に示しているように、生老病死の四つの苦悩よりの解脱にあったと考えられる。また、この四苦に愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦の四つを加えて八苦からの解脱が目的であったとされている。

この四苦八苦なる苦悩は、人間に心があり、その上に、この世に生まれると必ず、その生命の断絶である死を迎えなければならない宿命により生じてくるものである。つまり、人間に死が存在しなかったならば老も、病もない訳で、その他の苦もなく、死が存在するために諸々の苦悩が生じることになるのである。したがって、人間の苦悩は死によって生じるものであり、死苦が根本であり、かつ、最も深淵な苦悩と考えることができる。

釈尊の出家求道の原因は、厳密には諸々の苦悩の根本である、この死苦の解脱にあったのである。根本苦である死苦の解脱がなされれば、支葉苦である諸々の苦悩も、それに従って解脱するものである。

このような意味をふくんで、仏教は人間の生死の苦悩からの解脱道である。したがって、いかなる仏教もこの枠をはずれると仏教とは呼ぶことはできない。

また、今日の科学文明と豊かな経済力は、人間の老病苦や愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦などを釈尊の時代とは比較にならないほど解決してきている。例えば、昔は外国に行く場合などは、一生逢えなくなることをも意味し、涙して別れたのに、今日は、交通機関の発達によって、お互いに自由に逢うことができるようになり、愛別離苦が楽しみにさえなっているとも言える。しかし、死のみは未だに、いかなる文明も未解決であり、釈尊の時代と同じ状態にある。

どのように平和であっても、また医療が進歩して全ての病気を治療するようになったとしても、人間の死はさけられないのである。人間にとって、交通事故やガンなどの難病で亡くなる率は何パーセントであろうが、自己の死は百パーセントである。現代では、国家や個人が膨大な経費を交通事故や難病対策に注ぎこんでいるが、もっとも確実におそってくる一大事である死に対して、無対策でいるのはどうしたことなのであろうか。

もっとも、現代では生死の苦悩からの解脱道を求めているはずの仏教者ですら、その本来の課題に真剣に取り組まないのであるから、一般の人々は当然というべきかもしれない。

釈尊は二十九歳のとき、この生死の苦悩からの解脱を求めて、豊かな王家の生活を離れて樹下石上に生活する沙門になられたのである。六年の修行で実践した断食や止息行という凄まじい苦行は、彼が偉大であったから、そのような行をしたのでなく、その苦行より更に苦しい生死の苦悩が彼をして、それを行ぜしめたのである。

どんなに自己の人生を真剣に生きても人間は必ず死を迎え、すべてを失って無に帰していく運命であり、このことを自覚したとき釈尊は苦悩のあまり、呻き声（カルーナー karunā）をあげられたのである。この釈尊の感じられたカルーナーつまり自己の死を自覚した人の、言葉にならない深い苦悩が、彼に出家求道を決意させ実行させたのである。このカルーナーを中国の仏教者は悲と訳している。仏教の原点が釈尊の感じられた、このカルーナーにあることを仏教者は忘れてはならないのである。

釈尊の自己の死の自覚がカルーナーという深い苦悩となり、カルーナーがそれより解脱したいという求道心をおこし、これが六年の修行の後に菩提樹下の悟りによって生死の苦悩からの解脱道を発見し、安心と生きがいのある生涯を築くことができたのである。

二　人間の真実のありよう

釈尊の悟りは、次の自説経の示すように人間の真実のありようが縁起（pratitya-samutpāda）であるという発見よりはじまった。

「まこと熱意をこめて思惟する聖者に、かの万法のあらわれなるとき、かれの疑惑はことごとく消えさった。縁起の法を知れるが故であった。」

縁起という言葉は仏教独自の語と考えられており、「縁によって起る」、即ち漢訳の因縁所生の意味で、人間がさまざまな因縁により起っているということである。

後の中観仏教になると、人間は、縁起であるから無自性であり、空であるということになるのであって、実体的は自己

認識の否定を、その意味のなかに含んでいる。

人間は、青少年期になって自我が確立してくると、自己という実体があると思い、固定した自分の身体や思想があると思うようになる。自己が実体としてあると思っているから、自分を大切にする我見も生まれ執着が起きる。また、自分の思うままにならないものに対して苦悩を感じるようにもなるのである。そして、自我が完全に否定されて無になる死にのぞんで、苦悩は最悪の状態になり、カルーナーをあげることになるのである。

釈尊は菩提樹下における坐禅による澄心静慮のなかから、人間の真実のありようは、そのような実体ではなく、縁起なるものであることを発見するのである。人間の心のなかには、生来、無明という濁りがあり、それが自己が実体であるかのごとく虚妄分別してしまうのである。それによって自分本位の我見が生まれ、人と争いを生じたり、自分の思うままにならぬものに対して苦悩を持つに到るのである。

釈尊の悟りは、六年の苦行による無私の心境と坐禅のもつ澄心静慮によるものと考えられる。彼は、この悟りにより無明の濁りを澄まさせ、その上で静慮を続けて、人間をマクロとミクロの眼で正視し、自己の真実のありようが多くの因縁によって所生され、生滅流転している縁起性のものであることを発見するのである。

まず、人間の真実のありようは、時間的に現在の自己の生命が、過去より親から子へと、果しない伝承によって将来されたもので、自分一人が何億という先祖の因縁によって所生されているということである。今日の分子生物学は、個体としての人間の誕生である単細胞の受精卵のとき、その遺伝子（DNA）のなかに生物が地球上に発生してからの情報を有していることを明らかにしており、多くの先祖の因縁により、人間が所生されているという釈尊の立場を実証している。このことは電子顕微鏡におとらない眼を釈尊の悟りが持っていたことを物語るものである。

しかし、人間の肉眼ではとらえられないことであるが、人間の身体を細胞レベルのミクロな眼でとらえると、大脳の神経細胞以外は絶えず生滅流転しており、旧い細胞が新しい細胞に交代し、六年間で三十兆もある全細胞が新しくなっている。これは、はげしい破壊と建設が身体の中で同時に行われていることであり、まさに生滅流転が人間の実相であることを示している。このことは、人間の体が多くの因縁によって所生されながら、しかも時間的に一刹那ごと生滅流転している存在でもあることを物語っており、固定した実体ではないことを実証している。

最近の生理学が明らかにしているように、生命の座は一つの細胞にあり、人間の身体は約三十兆の細胞の集合で、

まさに宇宙的存在である。しかも、この無数の細胞の因縁所生により個体としての人間は成り立っているのである。この意味でも人間存在は固定的実体とは考えられない。

このような釈尊の悟りは、人間存在が実体でなく縁起なるものであるのに、それを知らないで無明の濁りにより虚妄分別して実体と思い、これに執着して苦悩している様を如実智見し、次に、どうすれば苦悩から解脱して安心が得られるかを発見することになる。

三　生死の苦悩からの解脱道

釈尊は坐禅の澄心静慮のなかから縁起なる人間の真実のありようを発見し、さらに、どうすれば生死の苦悩を解脱できるかの鍵を発見することになる。その鍵は無明なる濁りによって生じた我見を捨てることによって、自己の真実である縁起性を自覚する智慧が生じその智慧を依り処にすることにより苦悩を解脱し、安心が決定してくるというものである。

釈尊は、その悟られた生死の苦悩からの解脱道を人々に、十二縁起や苦集滅道の四諦説として体系的に説示している。

次に、四諦説により、その生死の苦悩からの解脱道を明らかにして行きたい。

まず、苦諦について釈尊は『律蔵大品』のなかで次のごとく述べている。

「実に尊い真理である苦しみは、次のごとくである。生まれることも苦しみであり、老いることも苦しみであり、病も苦しみであり、死も苦しみである。憂い、悲しみ、苦痛、悩み、悶えもまた苦しみである。」

この説示は、釈尊の悟りの立場から我を主体としている人、つまり我見を中心に生きている人間の人生が苦しみに満ちたものであることを示している。我見により自分本位に生きている人の人生には、老・病・死など多くの欲望をさまたげるものがあり、それらは必ず苦しみの原因となる。

現在、平和で健康な生活をしている人には苦悩の実感がないかもしれないが、いつかは老化し、病いにかかり、そして最後には死んで、すべてのものを失うのである。そして豊かな高い生活をしている人ほど、無一物の死の谷底におとされる恐怖は大きいのである。また、年老いて病いにふし、死に直面したときに解脱を求めても、もう手遅れである。それは、手のほどこしようもない末期のガン患者と同じように、仏教でも救いようのないものである。したがって、全ての人々が青少年時代に自己の苦なる真実に目ざめ、それより無我行の実践をはじめなければならない。また、われわれの我見は生きている間、存在するものであり、したがって、修行は一生涯つづけねばならないものである。

人間には、四苦八苦といわれるように、さまざまな苦悩が

あるが、根本苦は死である。老いも病いも死が存在しなければ、なり得ないものであり、それらは、みな死のきざしであり、その先に必ず死があるから苦悩となるのである。この生死の苦悩は、釈尊が出家されたときに自覚されたものであり、この苦悩から解脱しようと出家求道されたのである。六年のきびしい苦行にたえられたのも、それだけ苦悩が深かったことを示している。

苦諦の説示は、人々に生死の苦悩を自覚させることによって、求道心を喚起させ、それによって解脱を得さしめたいとする釈尊の願いがこめられている。このことを道元禅師は『学道用心集』のなかで無常を観ぜよと次のごとく述べている。

「無常を観ずる時、吾我の心生ぜず。名利の念起らず、時光の太だ速やかなることを恐怖す。ゆえに行道は頭燃を救う。」

生死の苦悩の実感のない人に、仏道を求めよと言っても無理なことで、それでは行動にならない。まず、人々に自己の死を自覚させ、それによって解脱を求める心と行動を起こさせなければならない。この点が現代の仏教伝道には欠けており、したがって頭燃を救うような行動が生まれないのである。

仏教は自己の死を直視する男性的な宗教であり、その参学には、いつかは死んで土くれになるという悲痛なカルーナーの自覚が根底になければならない。

次に、集諦について釈尊は次のごとく述べている。

「実に尊い真理である苦しみの生起の原因は次のごとくである。それは即ち、再び迷いの存在をもたらし、喜びと貪りをともない、ここかしこに愛着して歓喜を求める妄執（渇愛）である。それは享楽的欲望を求める妄執と個体の生存をむさぼる妄執と、生存の滅無をもとめる妄執とである。」

この説示は、釈尊の悟りの立場から、生死の苦悩の原因が、外的なものでなく、心に内在する自己本位な妄執である我見にあると示している。

我見という自己本位の考えが、生死の苦悩の原因であるという釈尊の説示は、我見を自己と妄執している現代人には理解しにくいことである。したがって、この世は全て自己のためにあると妄執している人々に、生死の苦悩の原因が我見にありと理解させ、さらにそのような生き方を捨てるように説示して行く仏教伝道は至難のわざとなっている。

そこで、伝道上から大切なことは、人々がそれを捨てざるを得ないように説得することが大切なことになり、そのためには苦諦の説示によって人々が最後には土くれとなる無常な存在であることを熟知させなければならない。そして、その自覚から生死の苦悩から解脱したいという切なる求道心を喚起させることである。

現代人のような自我の肯定の上に生きている人間、つまり

我見を主体として生きている凡夫にとっては、欲望の充足が生きがいのように思えるが、考察してきたような釈尊の悟りの立場から人間を見ると、それが虚妄なる分別であったことが明らかになる。

人間の生命は、個体として有限なる生命を持った存在でありながら、同時にその個体のなかに生きている生命は、全一で無限なる生命でもあるのである。

凡夫は、この個体として有限なる生命しか知らないで、誕生から現在まで、もしくは眼先の未来までしか考えないで生きているのである。けっして自己の死後を見ようとはしないのである。つまり、後世意識が欠落しているのである。道元禅師の『正法眼蔵』の説示に「生死はほとけのおんいのちなり」とあるように、人間は自己の死を知ることにより、正覚をもつことになるのである。人間にとって死の自覚が文明の生まれる原点となっているということである。中国人は昔から自己の死後を考えない、つまり後世意識のない人々を野蛮人と称しているが、これは仏教で説く凡夫のことである。世界各国よりエコノミック・アニマルと呼ばれている現代の日本人は、まさに凡夫の典型でもある。例えば、その日本人の一人として先般、火災事故を起したホテル「ニュー・ジャパン」の横井英樹氏が考えられる。もし、彼が今度の事件で自分の全財産を抛って遺族や負傷者の救済にあたったならば、今までの数々の汚名が消えて、財界人としても名を残すことになったと考えられるが、彼は凡夫であるため、それが出来ないで現在ほうかむりをし続けている。しかし、まもなく、彼に訪れる死は、今、遺族や負傷者たちに財産を取られなくても、全財産と彼の生命をも取り上げてしまうのである。結局、人間は生まれる前も死後も無一物である。彼はまさに典型的なエコノミック・アニマルで後世意識がなく、そのために、悲しいかなこの道理が解らないのである。聖徳太子が日本人に示した「世間虚仮、唯仏是真」の世界が忘れられているのである。

仏教は、死の認識を通して、自己のなかに生きている全一で無限なる生命の風光を自覚するのであるが、それによって、人間に永遠なる生命の系譜があること、全生物が生命同根なる存在であること、また、有所得な我見だけでなく、無所得な営みをしている身心によって自己が存在していること、などを発見して行くのである。

この釈尊の悟りによるグローバルな人間省察により、個体として有限なる生命しか考えない有我の凡夫より、無我行の実践を通して、全一で無限なる生命のなかにある無我性の仏に依り拠を転依して行くことによって不死を得、安心を確立することができるというのが滅諦の説示である。それは個体としての自己は死滅しても、自己の生命や思想が子孫や人類

に相続されて、永遠なるものになるという安心をつくりだすことである。

次に、滅諦について釈尊は次のごとく述べている。

「実に尊い真理である苦しみの消滅は次のごとくである。それは即ち、その妄執を完全に忘れ去った消滅であり、捨て去ることであり、放棄であり、解脱であり、こだわりのなくなることである。」

この説示は、釈尊の悟りの立場から、生死の苦悩の原因である我見を捨てる無我行の実践により悟りを得、苦悩を解脱して安心が得られると、仏教における解脱の論理を示している。

我見を中心に生きている凡夫にとって、それを捨てよということは難しいことであるが、生死の苦悩から解脱するために釈尊は自己の成道の体験の上から、この道を歩めと言われているのである。われわれは今まで通り我見を中心にして生きて生死の苦悩に打ちひしがれて行くか、この旧見を捨てて釈尊の示された無我行の実践を通して悟りと安心を成就するか、いずれかを選ばなくてはならないのである。釈尊は無明におおわれて、その決断のできかねている凡夫に、さらにその解脱道の確かなことを説示されている。

仏教は生死の苦悩からの解脱道であり、その苦悩の生まれる素因である死は生命の断絶である。したがって、釈尊も生命の実相について深い考察をなされている。釈尊は、この生命の真実のありようを悟ることによって、生死の苦悩からの解脱道を発見することができたのである。

それは釈尊にとって、生物が地球上に誕生したときから、この生命の断絶である死を超克する道を持っていた事実を悟ることであった。このことを、釈尊は『相応部経典』のなかで次のごとく述べている。

「自分が悟った生死の苦悩からの解脱道は自分が創造した道でなく、過去の正覚者たちがたどった古い道を発見したのである。」

この説示のなかにある、過去の正覚者たちのたどった古い道というのが、私は生物のもっている生命の断絶を超克する道を意味していると理解するのである。

生物は今日の科学の語るところによると、電子顕微鏡でしか見ることができない微細な単細胞の生物として、今から三十数億年前、地域上に生まれたのである。この微細な単細胞の生物は微かではあったが、一つのすぐれた能力を持っていた。それは生物の身体にともされた、生命を相続させるという能力である。驚くべきことにこの能力は、この時から見事に三十数億年も生命を相続させ、今日、地球上に生存するすべてのすぐれた生物をつくりだしたのである。

この生物のもっている生命断絶である死を超克する道は、親生物は子生物に生きる場を提供するため、みずからは死滅

して行くという方法によってである。つまり、親生物が子生物へ自己を無にしてその生命移動と、生きる場の提供という無我行の実践によってそれが成就しているのである。しかも、生物は親より子へと世代の交代をする過程で、多くの生命断絶の危機に直面し、見事にそれを乗り越えてきた能力を遺伝情報（ＤＮＡ）として細胞の中に記憶し、より優れた生命の乗り物へと進化してきたのである。

地球上に存在する全生物は、このような親生物の子生物への生命の移動と、生きる場の提供という無我行の実践により、三十数億年という途方もない時間を生きつづけ、より優れた生命の乗り物へと進化してきたのである。

最近の分子生物学では、地球上の全生物が三十数億年前に同じ単細胞の生物として生まれ、それが今日の様々な生物に分化してきたものであり、仏教で説くように全ての生物が生命同根であることを証明している。

このような生命の実相を悟ると、人間が個体として有限なる生命体であると同時に、その中に全一で無限なる生命を有していることが理解できるようになる。釈尊は自己の生命の断絶である死を正視することを通して、このような全一で無限なる生命を悟られたのである。

われわれの個体としての生命のなかに、このような全一で無限な生命が存在しているのである。いや、自己本位な我見はそのように妄執しているが、真実は全一で無限な生命が主人公で、生命を断絶させないように、個体としての生物を生命の乗り物としている、という方が正しいのである。われわれ凡夫は、我見の妄執により主客を転倒して、我見が主人公であるように誤解し、全一で無限の生命の乗り物であることを忘れているのである。

このような生命の実相をふまえて人間を見ると、人間以外の他の生物は自分を無にして宿業に順じているのに、人間だけが心意識があるために自己を無にすることができず、あくなき自己主張をしているさまがよく理解できる。そして、集諦の説示するように我見という自己本位の考えが、生死の苦悩の原因となっていることが明かになる。

しかし、どんなに強欲な人間でも必ず老化し、病にふし、死んで、次の世代に生きる場を譲って行くことをみると、生物のもっている生命相続の営みである自己を無にして子どもへ生命を伝承するという無我行を実践していることが理解される。どんなに自我が、あくなき自己主張をしても、人間の生命は無意識の営みの中で、生まれたときから死への営みを続けているのである。人間の生命の営みのなかには、自殺への営みがある。自分を無にして他を生かすという、途方もない崇高な営みがあるのである。結局、どんな人間でも仏様と同じように無所得無所求な聖なる営みをしていることにな

る。このような意味で、仏教の立場から、全ての人間に仏性が有るとしたり、死者を無我行の完成した仏として受容するのである。

仏教の説く無我行の実践は、釈尊の悟りの立場から、このような生命の実相をふまえて、個体としての有限な自己だけを主体とした行き方から、無我行の実践を通して全一で無限なる生命に自己の依り拠を転依して行く営みである。それは、個体としての自己は死滅しても、自己の生命や思想が子孫や人類に相続されて永遠なるものとなるという安心を確立することである。

最後の道諦について、釈尊は次のごとく述べている。

「実に実に尊い真理である、苦しみの消滅に導く道は次のごとくである。これは、実に八項目より成る尊い道である。即ち、正見、正思惟、正語、正行、正命、正精進、正念、正定である。」

この説示は、釈尊の悟りの立場から、苦悩の原因は我見にあり、凡夫は我見を依り拠にして生きているが、真実は我見だけではなく、無所得、無所求なる仏の生命があり、八つの無我行の実践により、そちらに依り拠を転依することによって生死の苦悩を超克して安心が得られるとしている。

したがって、仏教の行は全て、その内容が苦悩の原因である我見を滅する無我行でなければならない。坐禅も、念仏も全て悟りと安心への道としては無我行でなければならない。いかなる行も、その内容が無我なる実践でなければ仏行、つまり、正覚への行となって、生死の苦悩と解脱し、安心を得ることができない。

仏教は、全ての人々に存在する生死の苦悩を救済しなければならず、極端な厳しい行よりも、まず多くの人々が実践可能な道を示すことに心してきている。

その仏行は、現在の自己が行ぜられるような無我行より始めて、人間に死ぬまで我見が存在するのであるから、それを生涯実践し深めて行くことにより、悟りと安心を不動なものとしてゆく道である。

考察してきたように、釈尊によって開示された仏教は、無我行の実践によって、個体として有限な自己より全一で無限なる仏の生命に依り拠を転依することにより、生死の苦悩を解脱し、安心と生きがいを創造して行くものである。

四　死の不在の時代

この、仏教者の生死の苦悩からの解脱という課題は、全ての人間が死を前にした存在であり、誰もが真剣に取り組まなければならないことでもあるが、不思議なことに現代のわが国では、このことがあまり問題にならないのである。

つまり、現代の日本人は、生だけしか考えないで、その先にある死を無視し、あるいは死から逃避した生活をしている

のである。この死から逃避するような傾向は、古来から神道を中心に、死を穢れたものと考え、死を忌む心情として存在しており、自己の死を正視することにより、悟りと安心を見い出す仏教とは対象的な文化であった。

このような傾向は、明治政府によって国家目標に定められた富国強兵を達成させるために、国民を働き蜂にする教育によって、さらに強くなってきた。つまり、仏教のような自己の死を正視することによって正しい人生観を持った国民が教育されると、損得だけで行動する働き蜂のような国民が生まれなくなり、富国強兵の目標は達成されなくなる。そのため、奈良時代以来わが国の教育の根底にあった仏教を教育の場より排除してきたのである。その意味で明治以後わが国の教育は人間の教育ではなく、まさに、エコノミック・アニマルの教育であったと考えられ、今日、経済大国と呼ばれるようになって、その国家目標だけは達成することができることになった。

しかし、そのために損得勘定だけで行動するエコノミック・アニマルが国民の理想像になり、新に、非人間的な社会問題を生んでいる。

このような死から逃避した、死の不在の傾向は、第二次大戦後の三十年に余る平和と治安維持により、戦争や事件による死の危機をなくし、更に死を遠いところのものとしている。

また、経済の向上に伴って医療も整備され、患者を完全看護により病院にとじこめて家族との交流をも遮断してしまった。そのため、人々は家族の老病死すら遠いものと感じるようになってきている。

このように老病死のもつ苦悩を実感できなくなった人々は、更に、最近の葬祭産業のすすめる華美な葬儀により、静かに死者を観想する時もなくなり、いよいよ死の不在の傾向を強くしている。

釈尊が説示しているように、人間は他の生物と異なって自己の死を自覚することから真の人生の目的を明らかにすることができるのである。ところが、現代の死の不在なるわが国の人々は、大人でも、なんのために生まれて、そして、働き、最後に死ななければならないのか、ということすら解らないでいるのである。そのため簡単に国家目標であった富国強兵のためのエコノミック・アニマルになり果て損得だけで行動する人間となってしまっている。しかし、損得だけ考えて、自分のためだけ生きる人間は、どんなにお金や財産を得ても、最後は死んで無一物になるのであり、その人の人生は結局、徒労であったことになる。

このような、人生観を欠落した、物質的な豊かさが人生の目的だと思っている最近のわが国の親たちは、子どもを学習

塾などに入れるために、母親までが外に働きに出て、両親不在となり、そのため家庭の教育の場としての機能を破壊してしまっている。このことが最近の深刻な社会問題である、子どもの非行や暴力を起こさせる原因となっている。

また、このような死の不在の傾向は、大人でもガンの宣告すらできない、精神的に脆弱な国民にしてしまった。わが国では昔、武士が十五歳の元服のとき、割腹の作法を習うことによって、武士道が死の超克にあると教えられ、その自覚を持ったことと考え併せると、あまりの差に驚かざるを得ない。

このことは、国家の教育によって骨抜きになり、道元禅師が示された「生を明らめ、死を明らむるは仏家一大事の因縁なり」ということを説示できないでいる、われわれ仏教者のふがいなさをも物語っている。わが国で、今日ガンの宣告ができないということは、仏教者が釈尊の説かれた生死の苦悩からの解脱道を伝道していないことを意味しており、深く反省しなければならないことである。

現代のわが国では、人間は、なんのために生まれ、働き、最後に死ななければならないのかも解らない人々が、結婚して子どもを産み、育てているのであるから、人間教育などできる訳けがなく、家庭では、ただエコノミック・アニアルの教育だけなされている。したがって、このため人間性喪失した子どもたちによって家庭や学校における暴力などが激増することになるのである。

このような死を逃避し、死の不在の傾向は、仏教の伝道上だけでなく、わが国民の精神の危機を示すもので、その対策に真剣に取り組まねばならない。

五　伝道の原点

仏教における伝道は、釈尊により開示された生死の苦悩からの解脱道を人々に伝達し、それによって悟りと安心を与えて行く営みである。仏数の原点は、彼が二十九歳で出家求道を決意されたときに感じられた自己の死に対する深い苦悩であった。

どんなに人生を真剣に生きても、人間は必ず死を迎え、全てを失って土くれになってしまう運命にある。釈尊はこのことを自覚した時に苦悩のあまり呻き声（カルーナー）をあげこれよりの解脱を求めて出家求道し、結局、菩提樹下の悟りによって解脱が得られたのである。したがって、この釈尊の感じられたカルーナーが仏教を生む原点となったのである。

人間に宿命として死が存在し、したがって現在どんなに健康で幸福な人であっても、必ずいつかは死を迎えて無に帰して行くのであり、全ての人々にカルーナーがあることになる。釈尊は悟りの立場から、自分だけでなく全ての人々に、

このカルーナーのあることを認識し、思いやりにより自分の発見した解脱道によって人々の救済を決意されるのである。彼が、成道後クシナガラで入滅されるまで、樹下石上に生活しながらの四十五年の伝道は、人々のカルーナーを感じての思いやりであった。

つまり、仏教における伝道は、釈尊の自己の死という悲から、悟りを経て、慈という思いやりに展開することによって成立したものである。つまり仏教伝道の原点は思いやりにあることになる。

釈尊の時代と同じく現代も人々の死はさけられない宿命であり、釈尊が悟られた生死の苦悩から解脱道が真実であるならば、仏教は全ての人々に説示されなければならないものである。われわれは仏教者として、釈尊の悟られた道が真実なることを信じているのであり、この点からも「広度諸衆生」という伝道の願いを持つものである。

六　無我行としての伝道

釈尊によって悟られた生死の苦悩からの解脱道は、四諦説をふまえて考察したように、苦悩の原因は外にあるのではなく、心の中にある我見という自分本位の考えにあるとし、それを滅する無我行の実践により、悟りと安心が得られるものであった。

釈尊は、断食や止息の行などの苦行を実践して、我見を断じる無我行を実践し、それによって菩提樹下で悟りを得ることができたのである。しかし、釈尊は全ての我見を滅無した訳けでなく、また、生きている人間にそんなことは不可能なことである。仏教では、悟りの立場から人間を省察して煩悩無尽を明らかにしているように、人間は生きているうちは我見を滅尽することはできないものである。それは、唯識教学が深い禅定のなかから指摘しているように人間の無意識のなかに末那（mamas）があって、全ての意識を自分本位なるものに染汚してしまうからである。

したがって、悟りを得た釈尊であっても人間であり、我見は生じてくるので、一生涯、無我行の実践は必修の要件であることになる。例えば、それは生きている人間が病気を避けることはできず、いつも予防と発病の時の処置を必要としていることと同じである。

釈尊は、無我行の実践として、悟りを得た後も樹下石上の生活をしながら、四十五年もの間、人々の救済のため伝道を実践されたのである。彼が成道後、クシナガラで亡くなるときまで、ひとときとして伝道を棄てずに貫き通したのは、彼の伝道が無我行の実践で、彼の安心の道であったからである。

この釈尊の無我行の実践としての伝道は、全ての仏教者が行じなければならないものである。現代では、伝道は話芸の

すぐれた説教師が行うものとする誤解があるが、仏教における伝道は、自末得度先度他の無我行であり、全ての者が実践しなければならないものである。

結び

仏教における伝道は、釈尊の教えにより生死の苦悩からの解脱道を見い出したものが、自分と同じカルーナーを持っている人々への思いやりから、その解脱道を伝達する営みである。また、その伝道活動は、仏教の教理上から自未得度先度他の無我行と考えられ、単に他者の救済という利他行としてでなく、自分の我見を滅することにより安心を得るという自利行としての内容を持つものである。

つまり、仏教の伝道活動は人々の救済という利他行であると同時に、それが自末得度先度他の行として、自分の我見を滅する行となり、自利行となるのである。仏教の伝道は、一行のなかに自利利他が同時に現成する不可思議な実践で、まさに、それによって仏教の覚行として円満したものとなるのである。

仏教の伝道が、ただ人々に考えを説き安心を与えるという意味だけでなく、自己の宗教体験を豊かにし、安心や生きがいを創造しているのは、自利利他覚行円満するものであるからである。

われわれは、現代のような死の不在の時代の伝道者として、仏教伝道が他者の救済と自己の救済が同時に行われる不可思議行なることをよくよく自覚しなければならない。